慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	was alles, wer alles, wo allesなど : allesとは何ぞや
Sub Title	was alles, wer alles, wo alles usw. : Was heißt ‚alles'?
Author	岩﨑, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.28 (2011. 3) ,p.1- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20110331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

［特別寄稿］

was alles, wer alles, wo alles など

—— alles とは何ぞや——

岩崎英二郎

次の例文（1a）と（1b）を比べてみていただきたい。

(1a) Was hast du dir gekauft?

(1b) *Was* hast du dir *alles** gekauft?

* つねに alles の形で用いられる。alle, allen, aller のように語形変化することはなく、また all のように無語尾で用いられることもない。

「きみは何を買ったのか」という意味は両者に共通しているが、例文（1a）が、何を買ったかについていわば何の条件もつけていないのに反して、（1b）のほうは、そこに alles が含まれていることによって、買ったものが一品ではなくて、おそらくは二品以上、つまり話し手は相手がいろいろな品物を買ったことをあらかじめ想定していることが示されている。いささかまわりくどい説明で恐縮だが、要するに alles は、話し手があらかじめそのようなことを想定していることの、いわば「いろいろ」や「さまざま」のシグナルとして、聞き手に伝わるのである。

(2a) Wen hast du sonst eingeladen?

(2b) *Wen* hast du *alles* sonst eingeladen?

「きみはほかに誰を招待したのか」との問いである。この場合の（2b）

における alles の役割も、(1b) とまったく同じである。(1b) の場合には、ドイツ人の家庭では珍しくないことだが、知人から電話で夕食に招待され、自分以外にも何人かの人たちが招かれているという前提のもとに、このような問いを発したのだろう。

それではたまたまインターネットで目にした類似の例を、いくつかお目にかけよう。

(3) *Von wem alles* hast du einen Autogramm?

有名人のサイン (Autogramm) をもらって喜ぶ心理は、東も西も変わりないらしいが、「これまでどんな人たちからサインをもらったのか」という問いである。

(4) *Womit alles* beschäftigen Sie sich jetzt?

いまどのような仕事をしておられるのですが、という質問だが、alles が加わることによって、相手が平生からいろいろな仕事に従事していることを前提とした問いであることが見て取れる。

(5) *Wozu alles* ist Magnesium während der Schwangerschaft wichtig?

妊娠中 (während der Schwangerschaft) のサプリメントとしてカルシウムやマグネシウムを、ということをよく耳にするが、その可否はともかく、「どのようなさまざまな効果があるのか」という問いが wozu alles wichtig? である。

以上の用例は、多かれ少なかれすべて〈問い〉(Frage) であったが、次に alles が〈感嘆〉(Ausruf) の表現に用いられる例を挙げよう。

(6) *Was* du auch *alles* weißt, sagenhaft!

(7) *Wo* du *alles* gewesen bist! Unglaublich!

(8) *Worüber alles* Umfragen gemacht werden!

(9) Diese Grausamkeit! *Wozu* ist der Mensch doch nicht *alles* fähig!

用例（6）は、「きみは何でもよく知っているんだね」、(7）は「きみはずいぶんあちこちに行ったことがあるんだなあ」という驚きや賛嘆の表明だが、alles の役割自身は〈問い〉の場合とまったく変わらない。なお sagenhaft は英語の legendary、unglaublich は incredible ないし unbelievable である。(8）も感嘆文だが、近頃はなんでまたこんなにアンケートばかりはやるのだろうか、との慨嘆でもあろうか。用例（9）では、単なる wozu と alles の組み合わせではなく、wozu doch nicht alles となっていることに注目していただきたい。doch は御存知のように感嘆文特有の心態詞だが、nicht には否定の意図はまったくなく、いわば冗語である。このような冗語の nicht は感嘆文に好んで用いられ、強調の効果があると言われている。「なんたる残虐さ！　人間とはここまでやれるものなのか！」という嘆きである。なおこの種の nicht は、以下の引用例にもしばしば顔を見せるので、そのことも念頭に置いて読んでいただきたい。

ところで肝心の alles だが、なぜ本来「すべて」や「何もかも」を意味するはずの alles が、「いろいろ」や「さまざま」のシグナルとして使われるようになったのだろうか。その経過は比較的容易にあとづけられると思う。次の用例を見ていただこう。

(10) *Was* eine Hausfrau *alles* machen muss!

御覧のとおりこれは、一家の主婦ともなると、なんとさまざまなことをやらねばならぬものかという、おそらくは昔も今も変わらぬ嘆息まじりの感嘆文だが、この例文を読むだけでも、掃除、洗濯、食事の用意、子育て、おまけに夫の世話などなど、「ありとあらゆること」「何もかもすべて」が

「じつにさまざまなこと」を意味するようになった経過が、一目瞭然ではないだろうか。

ところでこの語の位置づけについては、ドイツ語圏の国々で刊行されているいわゆる独独辞典類の記述もまちまちで、評価もまだはっきりとは定まっていないようだ。そのなかで、辞書記述としての体(てい)すらなしていないと思われるのが、意外にもDudenの大辞典（Das große Wörterbuch der deutschen Sprache, Bd.1, S.142, 1993）で、〈stärker vereinzelnd, die Einzelglieder einer Gesamtheit betrachtend〉というきわめて漠然とした説明のあと、wem alles (*welchen Leuten insgesamt u. im einzelnen*) hat er wohl diese Geschichte erzählt! ; was war dort alles zu sehen? の二つの例が挙げられ、次にそれらとはまったく異質のvorn sind alles (*nur, ausschließlich*) Wagen erster Klasse が続く。あえて「異質」という言葉を使ったのは、このallesは明らかに主語であり、その直前のwas war dort alles zu sehen? のallesや、その直後のwas es [nicht] alles gibt! のallesとはまったくの別物だからである。Dudenらしからぬこのように杜撰な記述と比べて、お見事の一語に尽きるのが、Dudenよりもほぼ30年も前、当時の東ドイツのInstitut für deutsche Sprache und Literatur (Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin) から刊行され始めた『ドイツ現代語辞典』(Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, Bd.1, S.105, 1964）の記述で、この種のallesだけを一纏めにして別項目として扱い、umg. (＝normalsprachlich-umgangssprachlich) と指定した上で、wer kommt denn alles?; was hat er alles gesagt?; was hast du alles geschenkt bekommen? の三つの疑問文の例を挙げたあと、ブレヒトの戯曲『第三帝国の恐怖と悲惨』からwem zeigen Sie denn das Haushaltungsbuch allesを引用し――引用例（42）を参照のこと――、さらに感嘆文の用例としてwas hast du (nicht) alles angefangen! とwas es alles gibt! の二つを挙げ、最後にsalopp (＝salopp-umgangssprachlich) と指定したich habe Gott weiß wen alles gefragt! で締めくくるという、至れり尽くせりの記述である。

それではこの種のallesの使用例を、十七世紀以降の文学作品からいくつか引用して、本稿を終えることにする。これらの用例を通じて、さまざまな文脈（Kontext）、さまざまな場面（Situation）で使われるallesに習熟し、出来得ればみずからも使えるようになっていただきたい。なおここで

それら引用例の訳文について一言お断りしておきたいが、訳文には原則として既訳を使わせていただいた。 著名な作品には複数の邦訳があることもまれではないが、その場合には、入手可能なかぎり古い訳のほうを採用した。その理由は、明治、大正、あるいは昭和初期の先輩たちの、文章力はもちろんのこと、ドイツ語の読解力もまたいかに優れていたかを、この機会にぜひ知っていただきたいと思ったからである。ついでに「ちょうちょ」（蝶々）を「てふてふ」と書くような歴史的仮名遣いに、いくらかでも親しんでいただければ、望外の喜びである。なお若い読者のために、もともと付けられていたルビ以外にも適宜ルビを添えておいたことをお断りしておく。

(11)

[...]

WALPE. Ich werde ja fragen dürfen, was es gibt.

JOHANNES. Gäste wollen kommen. Weißt's nu?

WALPE. Laß sie kommen in Gottes Namen; ich will sie schon satt machen.

JOHANNES. Weißt's denn auch, *wer alles kömmt?*

WALPE. Das kann ich nicht wissen. Weißt du es aber, so sage mir's, damit ich mich ein wenig drauf schicken kann.

JOHANNES. Achtzig, gottlob!

WALPE. Wieviel?

[…]

(Christian Reuter, Graf Ehrenfried, Andere Handlung, Anderer Auftritt)

ヴァルペ　わたしだって、何があるのぐらいは聞いたっていいでしょう。

ヨハネス　客が来るのさ。これで分かったか？

ヴァルペ　来たっていいわよ、お腹いっぱい食べさせてやるわ。

ヨハネス　どんな連中が来るのか、知ってるのか？

ヴァルペ　知るわけないでしょ。でも知ってるのなら教えてよ。少しは仕度もあるしね。

ヨハネス　80 人さ、ありがたいことに。

ヴァルペ　何人だって？
（クリスティアン・ロイター、エーレンフリート伯爵、第二幕、第二場）

クリスティアン・ロイターは、17 世紀のバロック文学を代表する作家の一人、ここに掲げるのは、予定される来客についての夫婦の対話だが、この種の alles が、当時の日常会話でもごくふつうに用いられていたことを示す証左ではなかろうか。

(12) *Was haben sie nicht schon alles übersetzt*, und was werden sie nicht noch übersetzen! Eben itzt habe ich einen vor mir, der sich an einen englischen Dichter – raten Sie einmal an welchen! – gemacht hat. O Sie können es doch nicht erraten! – An *P o p e n*.

Und in Prosa hat er ihn übersetzt. Einen Dichter, dessen großes, ich will nicht sagen größtes, Verdienst in dem war, was wir das Mechanische der Poesie nennen; dessen ganze Mühe dahin ging, den reichsten, triftigsten Sinn in die wenigsten, wohlklindsten Worte zu legen; dem der Reim keine Kleinigkeit war – einen solchen Dichter in Prosa zu übersetzen, heißt ihn ärger entstellen, als man den Euklides entstellen würde, wenn man ihn in Verse übersetzte.

(Gotthold Ephraim Lessing, Briefe, die neueste Literatur betreffend, 1.Teil, 2.Brief)

これまで彼らはなんとさまざまなものをすでに翻訳してきたことでしょう！ そしてこれからもなお翻訳し続けることでしょう！ いまわたしが手にしているのは、ある英国の詩人の作品の翻訳です ― その詩人が誰だか、当ててみませんか？ いや、まず当たらないでしょうね。― あのポープ* ですよ。

しかも訳者は、その作品を散文体で翻訳したのです。いいですか？ その人の最大のとは言わぬまでも、大いなる功績が、詩における構造的なるものとわれわれの呼ぶものにあり、その人のすべての努力が、内容がきわめて豊富で、しかも人の心に訴える意味内容を、いかにして最小限の美しい言葉に凝縮するかに向けられており、その人にとって韻とはけっして些末（さまつ）な事柄などではなかった、そのような詩人の作

品を散文で訳すということは、かのユークリッド** の書物を韻文で訳した場合に起こるであろうよりもさらに徹底して、原作を歪めるということなのです。

（ゴットホルト・エフライム・レッシング、

最新文学書簡、第一部、第二書簡）

* 筆者注：アレキサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688-1744、英国の詩人）

** 筆者注：エウクレイデス（Eukleides, BC365?-BC275?, 古代ギリシアの数学者、天文学者、ユークリッド幾何学の父と言われる）

レッシングの『最新文学書簡』は日本語に翻訳されていないので、筆者自身の生硬な試訳でまことに恐縮だが、Was haben sie schon alles übersetzt! ではなく、Was haben sie *nicht* schon alles übersetzt! となっていることに注目していただきたい。上にも述べたように、感嘆文にときおり見られるいわば冗語の nicht である。

(13)

RECHA. Prinzessin, ...

SITTAH. Nicht doch! nicht Prinzessin! Nenn

Mich Sittah, – deine Freundin, – deine Schwester.

Nenn mich dein Mütterchen! – Ich könnte das

Ja schier auch sein. – So jung! so klug! so fromm!

Was du nicht alles weißt! nicht alles mußt

Gelesen haben!

RECHA. Ich gelesen? – Sittah,

Du spottest deiner kleinen albern Schwester.

Ich kann kaum lesen.

SITTAH. Kannst kaum, Lügnerin!

(Gotthold Ephraim Lessing, Nathan der Weise, 5.Aufzug, 6.Auftritt)

レヒャー　お姫様……

ジッター　いやですわ！ お姫様なんて！ ジッターと云って頂戴 — あなたのお友達と、あなたの姉さまと。小さな母さまと云って下さい！ お若くって、悧巧（りこう）で、それに本當にお優しいわ！ 何（と）んなことでも知

ってゐなさるでせうね！ 随分澤山お讀みでしたでせう！

レヒャー　妾(わらわ)が讀むだと仰ゃるのですか ― ジッター様、あなたの愚かしい妹をおからかひなさいます。妾のやうなものは讀めないも同然でございます。

ジッター　讀めないですって。嘘を仰ゃい！

（ゴットホルト・エフライム・レッシング、賢者ナータン、第五幕、第六齣、大庭米治郎訳）

Was du nicht alles weißt! nicht alles mußt gelesen haben! の大庭訳は正確だが、念のために、原文の構造を解説しておく。これはWas du nicht alles weißt! とWas du nicht alles mußt gelesen haben! の二つの感嘆文を一纏めにしたもので、後者を字句通りに直訳すれば、「あなたはなんとたくさんの書物をお読みになったにちがいないことか」ということになる。

(14)

ALTER. Fort! fort! daß wir den Mordhunden entgehen.

WEIB. Heiliger Gott, wie blutrot der Himmel ist, die untergehende Sonne blutrot!

MUTTER. Das bedeut Feuer.

WEIB. Mein Mann! Mein Mann!

ALTER. Fort! fort! in Wald! *(Ziehen vorbei.)*

(Link.)

LINK. Was sich widersetzt, niedergestochen! Das Dorf ist unser. Daß von Früchten nichts umkommt, nichts zurück bleibt. Plündert rein aus und schnell! Wir zünden gleich an.

(Metzler vom Hügel herunter gelaufen).

METZLER. Wie geht's euch, Link?

LINK. Drunter und drüber, siehst du, du kommst zum Kehraus. Woher?

METZLER. Von Weinsberg. Da war ein Fest!

LINK. Wie?

METZLER. Wir haben sie zusammengestochen, daß eine Lust war.

LINK. *Wen alles?*

METZLER. Dietrich von Weiler tanzte vor. Der Fratz! Wir waren mit hellem wütigem Hauf herum, und er oben auf'm Kirchturn wollt gütlich mit uns handeln. Paff! Schoß ihn einer vor'n Kopf. Wir hinauf wie Wetter, und zum Fenster herunter mit dem Kerl.

LINK. Ah!

METZLER *(zu den Bauern)*. Ihr Hund, soll ich euch Bein machen! Wie sie haudern und trenteln, die Esel!

LINK. Brennt an! sie mögen drin braten! Fort! Fahrt zu, ihr Schlingel!

(Goethe, Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand, 5.Akt, Bauernkrieg)

老人　さあ遁(に)げた遁げた！ かういふ鬼の様な奴等にとっ捉まっちゃ大變だ！

女　まあ！ 空がまるで血を流したやうだ！ 夕日も血の様に眞赤だ！

母　火事になる前だよ。

女　宅(うち)の人はどうしたらう！ 宅の人はどうしたらう！

老人　遁げた遁げた！ 速く森ん中へ！（皆通り過ぐ）

（リンク登場。）

リンク　抵抗する奴は片っ端から片附けるだ！ 村はもうこっちのものだぞ。五穀を焼いちゃ勿體(もったい)ねえ。殘しとかねえで、みんな出しちまふだ。速く！ ぢき火を附けるかんな。

（メッツレル、丘より走り降る。）

メッツレル　こっちの様子はどうだ。

リンク　御覽の通りの大騒ぎだ。好い加減すんだ頃に來たって駄目だよ。何處にゐた。

メッツレル　ヴインスベルクだ。痛快だったぜ。

リンク　どうした。

メッツレル　奴等を片っ端(ぱし)から突き殺してくれたよ。いやもう面白かったのなんのって。

リンク　奴等って誰だ。

メッツレル　ディートリヒ・フォン・ヴイレルの奴めが出しゃばってね。あの大馬鹿野郎めが！ 俺達が大勢で取り巻いて凄(すさま)じい勢を見せ

たものだから、奴めお寺の塔の上から媾和談判と來やがった。その中に誰かゞヅドンと額の邊に一発喰らはした。それっと言ふので大嵐のやうに驅け上って窓から下へ逆落としさ。

リンク　へへえ。

メッツレル（百姓等に向かひ）此の畜生奴等が！ のらくらしてやがると量見しねえぞ！ 何をぐづらぐづらしてやがる、鈍間（のろま）め！

リンク　よし、火を附けろ！ 中にゐる奴もついでに焙っちまへ！速く！ さっさとやっつけろ。此の餓鬼共奴（どもめ）。

（ゲーテ、ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン、第五幕、百姓一揆、関口存男訳）

メッツレルが「奴等を片っ端から突き殺してくれたよ。いやもう面白かったのなんのって」と言うのを受けて、リンクがWen alles? と訊ねる。Wen? ではなく、その直後にallesを付け加わえることで、その「だれ」が一人ではなく、かなりの人数であることが示されている。このWen alles? を日本語で表現することはむずかしいが、「奴等って誰だ」という関口訳はさすがである。

(15)

MADAME SOMMER. Mein Herz bewegt sich nach ihr.

POSTMEISTERIN. Aber wie's geht. Man sagte, der Herr hätte kuriose Principia gehabt; wenigstens kam er nicht in die Kirche; und die Leute, die keine Religion haben, haben keinen Gott und halten sich an keine Ordnung. Auf einmal hieß es: Der gnädige Herr ist fort. Er war verreist und kam eben nicht wieder.

MADAME SOMMER *(vor sich)*. Ein Bild meines ganzen Schicksals!

POSTMEISTERIN. Da waren alle Mäuler davon voll. Eben zur Zeit, da ich als eine junge Frau hierher zog, auf Michael sind's eben drei Jahre. Und da wußt jedes was anders, sogar zischelte man einander in die Ohren, sie seien niemals getraut gewesen; aber verraten Sie mich nicht. Er soll wohl ein vornehmer Herr sein, soll sie entführt haben, *und was man alles sagt*. Ja,

wenn ein junges Mädchen so einen Schritt tut, sie hat ihr Leben lang dran abzubüßen. *(Annchen kommt.)*

ANNCHEN. Die gnädige Frau läßt Sie sehr bitten, doch gleich hinüberzukommen; sie will Sie nur einen Augenblick sprechen, nur sehen.

LUCIE. Es schickt sich nicht in diesen Kleidern.

POSTMEISTERIN. Gehn Sie nur, ich geb Ihnen mein Wort, daß sie darauf nicht achtet.

LUCIE. Will Sie mich begleiten, Kleine?

ANNCHEN. Von Herzen gern!

(Goethe, Stella, 1.Akt)

ゾンメル夫人　ほんにその奥様はお痛はしい方でゐらっしゃるのね。

女房　それがまたどうでございませう、世間ではこんな事を申してをりました。何でも旦那様といふのは珍しいお考へを持ってゐらしって、お寺さへもおいでにならないといふ事でございました。お宗旨を持ってゐない人は神様を御存じでございませんで、決して身の上にいゝ事はございません。すると急に、旦那様が家を出ておしまひになったと、かういふ噂でございました。何でも旅にお出遊ばして、それっきりお歸りがなかったのださうでございます。

ゾンメル夫人（一人で）私の身の上そのまゝと言ひたいやうな。

女房　そこでもう世間では何だかだとその噂で持ちきったものでござゐます。丁度その時にてまへも嫁に参りましたばかりでこゝへ移りました。このミヒャエルのお祭で丁度それも三年になります。誰も彼も一人として同じやうな事は申しませんでして、お互いに耳こすりをして、きっとこのお二人は御夫婦ではないんだなぞと申しましたんですよ。どうぞてまへがこんな事をお耳に入れたと仰しやっては困ります。旦那様はおえらい方なんだらうが、あのお嬢様を屹度どこからか騙してお連れしたんだらうなんて、世間は勝手な事を申すものでございます。若い娘さんがもしそんな事でもしでかしたんですと、一生もう後悔しても追つきませんからね。

アアンヘン（登場）あすこの奥様がどうぞすぐにおいで下さるように仰しゃいました。ちょいと話をして、お目にかゝるだけになさりたいと

いふのでございます。
ルチエ　でもこのなりではだめね。
女房　そんな事仰しゃらないで行っていらっしゃいまし。なりふりなんぞを彼是(かれこれ)仰しゃるお方ではございません。
ルチエ　お前さんが御案内をして下さるの。
アアンヘン　えゝ、いつでも。
（ゲーテ、ステッラ、第一幕、秦豊吉訳）

und was man alles sagt の秦豊吉訳は「世間は勝手な事を申すものでございます」、まさに名訳と言うべきだろう。

(16) „[...] Selbst bei vielen Mitteln sind wir immer nur halb und halb zu Hause, besonders auf dem Lande, wo uns manches Gewohnte der Stadt fehlt. Das Buch, das wir am eifrigsten wünschten, ist nicht zur Hand, und gerade, was wir am meisten bedürften, ist vergessen. Wir richten uns immer häuslich ein, um wieder auszuziehen, und wenn wir es nicht mit Willen und Willkür tun, so wirken Verhältnisse, Leidenschaften, Zufälle, Notwendigkeit *und was nicht alles*."
(Goethe, Die Wahlverwandschaften, 2.Teil, 10.Kapitel)
「[…]
大きな資産があっても、わたしたちはいつでもほんとうに家におちついていることはありません。ことに都会でなじんでいたいろいろなことに不自由を感じるいなかでは、おちつきません。いちばんよみたくてならない本は、手もとにないし、いちばん必要だと思うものが、忘れられています。われわれはなんべん家庭をかまえても、またそこからとび出してしまいます。それもこちらが勝手にそうしようと思ってするのでなければ、こんどは境遇とか、情熱とか、偶然とか必然とか、そのほかいろんなもののおかげで、そうなってしまうのですよ」
（ゲーテ、親和力、第二部、第十章、實吉捷郎訳）

so wirken Verhältnisse, Leidenschaften, Zufälle, Notwendigkeit und was nicht

alles について、一言注釈を加えておきたい。「境遇とか、情熱とか、偶然とか必然とか」と四つ列挙したあと、und was nicht alles を付け加えるのは、まさに「その他もろもろ」を意味する und so weiter, und so fort, et cetera と同じ役割で、實吉訳では「そのほかいろんなもの」となっているが、was nicht alles や wer nicht alles には、そのような使い方もあることを知っておいていただきたい。

(17)

MEPHISTOPHELES.

Was du nicht alles zu erzählen hast!
So klein du bist, so groß bist du Phantast.
Ich sehe nichts –

HOMUNCULUS. Das glaub' ich. Du aus Norden,
Im Nebelalter jung geworden,
Im Wust von Rittertum und Pfäfferei,
Wo wäre da dein Auge frei !
Im Düstern bist du nur zu Hause. *(Umherschauend.)*
Verbräunt Gestein, bemodert, widrig,
Spitzbögig, schnörkelhaftest, niedrig! –
Erwacht uns dieser, gibt es neue Not,
Er bleibt gleich auf der Stelle tot.
Waldquellen, Schwäne, nackte Schönen,
Das war sein ahnungsvoller Traum;
Wie wollt' er sich hierher gewöhnen!
Ich, der Bequemste, duld' es kaum.
Nun fort mit ihm!

MEPHISTOPHELES. Der Ausweg soll mich freuen.

(Goethe, Faust, 2.Teil, 2.Akt, Laboratorium)

メフィストフェレス　好(よく)そんなに澤山饒舌(しゃべ)る事があるなあ。
お前は小さいが、空想家としては大きいぞ。己にはなんにも見えんが。

小人　さうでせう。あなたのやうに
北の国に生れて、蒙昧時代に、騎士や坊主の
ごたごたの中に人となっては、目が善く
開いてゐないでせう、あなたの領分は
暗黒の境です。
（四邊を見廻す）
茶いろになった石壁が剣形迫持の形をして、
曲がりくねって、低く、朽ちて、厭らしくなってゐる。
ここで此人が目を醒ますと、厄介な事になります。
即座に死んでしまひますから。
森の中の泉、鵠、裸體の美人、こんな物を
未来を豫想して夢に見てゐました。
それがどうして此境界に馴れられませう。
一番のん氣なわたくしですが、見てゐられません。
どこかへ連れて行きませうね。
メフィストフェレス　その始末には賛成だ。
（ゲエテ、ファウスト、第二部、第二幕、中古風の試験室、森鷗外訳）

メフィストの言葉 Was du nicht alles zu erzählen hast! の鷗外訳は、「好そんなに澤山饒舌る事があるなあ」、ちなみにほかの錚々たる翻訳家による訳文もお見せしよう。「よくもまあ、そんなに澤山話すことがあるなあ！」（阿部次郎）、「どうも何でもかでもよくしゃべる事があるなあ」（秦豊吉）、「なんと澤山話を知ってゐるんだらう」（櫻井政隆）、「臆面もなく、なんでもしゃべる奴だな」（相良守峯）、「じつによくしゃべることがあるなあ！」（高橋健二）、「よくまあ、まめに喋るやつ奴だな！」（佐藤通次）、「よくまあひっきりなしにしゃべるものだ」（手塚富雄）、「じつによくしゃべる小僧だなあ」（大山定一）、「おまえは、まあ、よくしゃべりやがる！」（井上正蔵）、「よくしゃべるなあ」（高橋義孝訳）、「なんだね、その喋りまくりようは」（山下肇）、「何とまああれこれお喋りする子だなあ」（柴田翔）、「なんと、ぺらぺらよくしゃべるやつだね！」（小西悟）、「なんだってペラペラと、よくしゃべるやつだ」（池内紀）、大同小異と言えばそれまでだが、

was nicht alles の感じを出すための工夫が、それぞれに凝らされている。なお劇作家久保栄の訳文もぜひ読んでみたかったのだが、彼のファウスト訳が、第二部の第一幕までで終わってしまったことは、まことに残念である。

(18)

ERSTER JÄGER.

Ei, wer ist denn das kleine Schelmengesichte?

MARKETENDERIN.

's ist meiner Schwester Kind – aus dem Reich.

ERSTER JÄGER.

Ei, also eine liebe Nichte?

(Marketenderin geht.)

ZWEITER JÄGER *(das Mädchen haltend).*

Bleib Sie bei uns doch, artiges Kind.

AUFWÄRTERIN.

Gäste dort zu bedienen sind. *(Macht sich los und geht.)*

ERSTER JÄGER.

Das Mädchen ist kein übler Bissen! –
Und die Muhme! beim Element!
Was haben die Herrn vom Regiment
Sich um das niedliche Lärvchen gerissen! –
Was man nicht alles für Leute kennt!
Und wie die Zeit von dannen rennt. –
Was werd ich noch alles erleben müssen!
(Zum Wachtmeister und Trompeter.)
Euch zur Gesundheit, meine Herrn! –
Laßt uns hier auch ein Plätzchen nehmen.

(Friedrich Schiller, Wallenstein, Wallensteins Lager, 5.Auftritt)

獵騎兵甲　おや、あの茶ぴいはだい？
酒保の女　妾の姉の子だ ― 皇帝領の産れさ。

獵騎兵甲　おや、ぢゃ姪御さんかい。（酒保の女入る。）
獵騎兵乙（娘をとらまへて）いゝ兒だ、まあおいらの傍にゐな。
給仕女　あっちのお客さんうっちゃとけないわ。（引放して去る。）
獵騎兵甲　あのたまは蹈(ふ)めるぜ。それにあの年増だ、篦棒(べらぼう)め。どんなに聯隊のお歷々が渋皮の剥けたあの阿魔(あま)ちょを張ったらう。月日はどんどん経って行ったなァ。どんな奴とだって近づきにならねえぢゃねえ、おれもまだどんなはめに打(ぶ)つからうやら。（曹長と喇叭手に）各々方の健康を祝します！お互いにこゝで同席しようではありませんか。
（フリードリヒ・シラー、ワレンシュタイン、
第一部 ワレンシュタインの陣営、第五登場、鼓常良訳）

原文では、Was man nicht alles für Leute kennt! と Was werd ich noch alles erleben müssen! の二つの感嘆文のあいだに Und wie die Zeit von dannen rennt. が挿入されているが、鼓氏は挿入されている「月日はどんどん経って行ったなァ」を先に訳し、Was man nicht alles... と Was werde ich noch alles... の二つを、「どんな奴とだって近づきにならねえぢゃねえ、おれもまだどんなはめに打(ぶ)つからうやら」と、まとめて訳しておられる。まことに思い切った意訳だが、原文の言わんとするところは、間然するところなく読者に伝わってくる。

(19) Peregrinus wußte in der Tat nicht recht, was er beginnen sollte, die Wütenden auseinanderzubringen und so einen Auftritt zu endigen, der ebenso lächerlich als entsetzlich war. Endlich gewahrten beide, daß die Türe des Zimmers weit offen stand, vergaßen Kampf und Schmerz, steckten die verderblichen Waffen ein und stürzten sich ins Zimmer.
Schwer fiel es nun erst dem Herrn Peregrinus Tyß aufs Herz, daß die Schönste aus dem Hause entflohen, er verwünschte den abscheulichen Leuwenhoek in die Hölle. Da ließ sich auf der Treppe Alinens Stimme vernehmen. Sie lachte laut auf und rief wiederum dazwischen: „*Was man nicht alles erlebt!* Wundersam – unglaublich! – wer hätte sich das träumen lassen! “–

„Was ist," fragte Peregrinus kleinlaut, „was ist denn schon wieder Unglaubliches vorgefallen?"

„O lieber Herr Tyß," rief ihm die Alte entgegen, „kommen Sie doch nur schnell herauf, gehen Sie doch nur in Ihr Zimmer."

(E.T.A.Hoffmann, Meister Floh, 4.Abenteuer)

ペレグリーヌスは、じっさいのところ、このふたりの怒れるものたちを仲に入って分け、怖ろしくもあれば滑稽千万でもある争いに結末をつけるには、いったいどうしたらよいものか、よくわからなかった。そのうちついにふたりは、部屋のドアが開けっぱなしになっているのに気づき、闘争も苦痛も忘れてしまい、破滅を招く武器をおのおの懐中にしまうと、部屋のなかに突進していった。

ペレグリーヌス・テュースくんはこうなってはじめて、美人がこの家から脱走した事実がおもたく胸にのしかかってくるのを知り、いまいましいレーウェンフークなど地獄にでも堕ちるがいいと呪うのであった。このとき階段のところからアリーヌの声が聞こえてきた。

彼女は大声で笑いながらも、そのあいまあいまに叫んでいるのであった、「なにもかもなんだってこんなことに！― 不可思議よ ― 信じられない ― こんなこと誰が夢にもおもったことだろう！」―

「どうして」と、ペレグリーヌスは声をひそめて訊ねた。「どうしていったいまたまた信じられないことがもう起こっちまったんだい」

「おう、テュースさま」と、老婆はかれにむかって叫んだ、「どうか早くうえにあがってきてくださいまし、どうかごじぶんの部屋に入ってごらんください」

(E.T.A..ホフマン、蚤の親方、第四の椿事、深田甫訳)

Was man nicht alles erlebt! というアリーヌの言葉は、「なんとまあ次から次へといろいろなことが起こるのだろう」という〈驚き〉の籠もった感嘆文だが、深田訳「なにもかもなんだってこんなことに」の「なにもかも」は「すべて」を意味するallの原意にこだわりすぎだし、「なんだってこんなことに」では、〈驚き〉ではなくて〈嘆き〉になってしまうのではないだろうか。

(20) Huldbrand erhob sich lächelnd, um zu sehn, ob es so sei, wie ihm Undine gesagt hatte, der Alte begleitete ihn, und das Mädchen gaukelte scherzend neben den Männern her. Sie fanden es in der Tat, wie Undine gesagt hatte, und der Ritter mußte sich drein ergeben, auf der zur Insel gewordnen Landspitze zu bleiben, bis die Fluten sich verliefen. Als die dreie nach ihrer Wandrung wieder der Hütte zugingen, sagte der Ritter der Kleinen ins Ohr: „Nun, wie ist es, Undinchen? Bist du böse, daß ich bleibe?“ – „Ach“, entgegnete sie mürrisch, „laßt nur. Wenn ich Euch nicht gebissen hätte, wer weiß, *was noch alles von der Bertalda in Eurer Geschichte vorgekommen wär!*“

(Friedrich Baron de la Motte Fouqué, Undine, 4.Kapitel)

ウンディーネの言ったことが本当かどうか見てみようと、フルトブラントは笑いながら立ち上がった。爺さんもついて来た。娘は戯(たわむ)れながら二人の傍らを跳ね廻っていた。見るとじっさい、ウンディーネの言うとおりだった。騎士は離れ島になったこの岬に、水の退(ひ)くまでは、いやでも留まらなければならなかった。三人はそこいらをぶらぶら歩いてから、ふたたび小屋の方へ足を向けた時、騎士は少女の耳もとにささやいた。

「さあ、どうだ、ウンディーネ。それともこのままいると言うと怒るかい。」

「知りません。私があなたの指をか噛まなかったら、ベルタルダのお話にあれからどんなことが出てきたかわかりはしない」とウンディーネは不機嫌に答えた。

（フリードリヒ・バローン・ド・ラ・モット・フーケー、水妖記、その四、柴田治三郎訳）

Wer weiß, was noch alles von der Bertalda in Eurer Geschichte vorgekommen wär! の柴田訳「ベルタルダのお話にあれからどんなことが出てきたかわかりはしない」は、was noch alles の noch のニュアンスすらも、「あれから」によって正しく読者に伝えてくれる。

(21)

WURZEL. Nun, das wär nicht übel, Bruder, jetzt lernen wir uns erst kennen, Bruder, und sollen schon wieder bös aufeinander sein, Bruder, das wär gfehlt.

JUGEND. Haha! Was fällt dir ein, Brüderchen? Fehlgeschossen, das endigt ja eben unsere Freundschaft, weil wir schon gar zu lange miteinander bekannt sind. Wir sind ja schon zusammen auf die Welt gekommen, weißt du denn das nicht mehr?

WURZEL. Ja, ja, ich erinnere mich schon, nachmittag wars, und gregnet hats auch.

JUGEND. Wir sind auch miteinander in die Schule gegangen. weißt du denn das auch nicht, wir sind ja auf einer Bank gesessen.

WURZEL. Ist richtig! Auf der Schandbank sind wir gesessen. *(Für sich)*. Ich kenn ihn gar nicht.

JUGEND. Ja freilich! Sie haben uns ja dadurch zwingen wollen, daß wir etwas lernen sollen.

WURZEL. Nun ja, was das für Sachen waren, aber wir haben nichts dergleichen getan. Oh, wir waren ein Paar feine Kerls! *(Für sich)*. Ich hab ihn mein Leben nicht gesehen noch.

JUGEND. Und wie wir beide zwanzig Jahr alt waren, haben wir die ganze Gemeinde geprügelt. Oh, das war ja prächtig, Brüderchen!

WURZEL. Oh, das war ein Hauptjux! *(Für sich)*. Ich weiß kein Wort davon.

JUGEND. Und getrunken haben wir, Bruder, das war mörderisch.

WURZEL. Oh, das war schändlich, Bruder!

JUGEND. Ja, *und was wir alles getrunken haben!*

WURZEL. Nu, einmal haben wir, glaub ich, gar einen Wein getrunken, das Verbrechen!

JUGEND. Ja, und was für einen!

WURZEL. Einen Luttenberger.

JUGEND. Und einen Grinzinger!

WURZEL *(für sich)*. Ist alles nicht wahr.

(Ferdinand Raimund, Das Mädchen aus der Feenwelt oder Der Bauer als Millionär, 2.Akt, 6.Szene)

ヴルツェル　おい、冗談だろう、弟よ、今知り合ったばかりだというのに、もう喧嘩別れかい、嘘だろう。

青春　ははは、何を考えているんだい、兄さん？ 違うよ、僕たちの友情がお終いになったのは、僕たちが長く知り合い過ぎたからだよ。僕たち一緒にこの世に生まれて来たんだよ、もう覚えてないの？

ヴルツェル　いやいや、覚えているよ、あれは午後のことだった、それに雨も降っていた。

青春　一緒に学校へも行ったよね。それも覚えていない？ 椅子に座ったじゃあないか。

ヴルツェル　その通り！ 屈辱の椅子に座ったものだ。（独白）こいつのことは全然知らんぞ。

青春　もちろんです、そうやって僕たち無理矢理勉強させられたんです。

ヴルツェル　まあそうだが、何を学んだんだっけ、いやいやそんなことしなかったぞ。おう、我々は絶妙のコンビだった！（独白）こいつには生まれてこのかた一度も会ってないぞ。

青春　そして僕たちが二人とも二十歳になったとき、仲間を全員叩きのめしたんだ、あれは本当にすごかった、そうだよねえ、兄さん。

ヴルツェル　おう、あれはおもしろかった！（独白）そんなこと知らんぞ。

青春　それに僕たちよく飲んだね、兄さん、目茶苦茶だった。

ヴルツェル　おお、あれは最悪だったよ、弟よ！

青春　僕たちが飲んだ量といったら！

ヴルツェル　うむ、確か一度ワインを樽ごと一本飲んでしまったな、あれは犯罪ものだった！

青春　そう、でどんなワインでしたっけ！

ヴルツェル　ルッテンベルガーさ！

青春　そしてグリンツィンガーも！

ヴルツェル（独白）何もかも本当のことではない。

（フェルディナント・ライムント、妖精界の娘あるいは百万長者になった百姓、第二幕、第六場、小松英樹訳）

und was wir alles getrunken haben! の小松訳は「僕たちが飲んだ量といったら！」。これでは酒の分量だけが問題になっていて、「どんな酒でもお構いなしに」というニュアンスがすっぽり抜け落ちている。残念ながら誤訳である。

(22)

CÄCILIE. Ich weiß, er reizt Sie gegen mich auf.

SITTIG. Im Gegenteil, er will für unser Glück wirken.

CÄCILIE. Ich wünsche, daß wir unser Ziel erreichen, ohne fremde Einmischung.

SITTIG. Sie sind ungerecht. Karl ist –

CÄCILIE. Mag er sein, was er will. Er ist ein Spötter, ein Witzkopf. Er macht sich über unser Verhältnis lustig. Sie verteidigen ihn, hab' ich nun nicht Grund zu klagen?

SITTIG. Hat jemand Grund dazu, so bin ich's. Mir das Mädchen nachzuschicken! – Ich schämte mich vor den Leuten, vor dem Mädchen selbst – das heimlich kicherte – ich bemerkte es wohl –

CÄCILIE. *Was Sie alles bemerken!* – Wenn man um ihn besorgt ist – *(Steht auf.)*

SITTIG. Besorgt? Ich bin kein Kind!

CÄCILIE. Ich bitte, sprechen Sie etwas leiser, der Vater schläft.

(Eduard von Bauernfeld, Bürgerlich und Romantisch, 2.Akt, 11.Szene)

ツェツィーリエ　分かってるわ、あの方、あなたをけしかけて、あたしたちの邪魔をしてるんだわ。

ズィッティヒ　逆ですよ、あの人は、ぼくたちのためを思っているんですよ。

ツェツィーリエ　他人様なんかのお世話にならずに、あたしたちの目的を果たしたいものね。

ズィッティヒ　あなたはフェアじゃありませんね。カールは―

ツェツィーリエ　どんな人だっていいわ。あざけり屋で、ひょうきん者で。あの人、あたしたちの仲を笑いものにしてるだけよ。あなたはあの人の肩をもつけど、あたしには文句を言う理由なんかないとおっしゃるの？

ズィッティヒ　文句を言う理由があるとすれば、それはぼくのほうですよ。女中にぼくのあとをつけさせるなんて！ ほかの人たちの手前、恥ずかしかったし、あの女中自身に対しても恥ずかしかった ― かげでくすくす笑ったりして ― ちゃんと気がついていたんだから ―

ツェツィーリエ　何でもよくお気づきになる方ね！ ためを思ってやってることなのに ―

（立ち上がる）

ズィッティヒ　ためを思うだって？ ぼくは子供じゃないんだ！

ツェツィーリエ　お願いだから、そんな大声を出さないで、父が眠っていますから。

（エードゥアルト・フォン・バウエルンフェルト、市民的とロマン的、第二幕、第十一場）

(23) Die Mutter sagte: „Du solltest gleich die Zeit bestimmen, und solltest gleich mit deinem Sohne verabreden, daß er dich in derselben zu dem alten Manne in das Rosenhaus führe, welcher dich schon auch in den Sternenhof geleiten würde.“

„Nun, so dränget nur nicht,“ erwiderte er, „es wird geschehen, das ist genug; binden, wißt ihr, kann sich ein Mann nicht, der von seinem Geschäfte abhängt und nicht wissen kann, welche Umstände einzutreten vermögen, die von ihm Zeit und Handlungen fordern.“

Die Mutter kannte ihn zu gut, um weiter in ihn zu dringen, er würde bei seinem ausgesprochenen Satze geblieben sein. Sie beruhigte sich mit dem Erlangten.

Sowohl sie als die Schwester dankten mir, daß ich dem Vater die Bilder gebracht hatte, die ihm ein solches Vergnügen bereiteten.

„Die Fußböden müssen auch vortrefflich sein“, rief er aus. „Sie sind viel

schöner, als die ungefähre Malerei andeuten kann,“ erwiderte ich, „mein Pinsel kann noch immer nicht den Glanz und die Zartheit und das Seidenartige der Holzfasern ausdrücken, *was man alles dort so liebt, daß nur mit Filzschuhen auf diesen Böden gegangen werden darf*.“

„Das kann ich mir denken,“ antwortete er, „das kann ich mir denken.“

(Adalbert Stifter, Der Nachsommer, 2.Band, 1. Die Erweiterung)

母は言った。「では早速その時をきめて、息子と打ち合わせをしなければなりませんわ。薔薇の家の御老人のところへ案内する段取りを。御老人はきっとシュテルネンホーフにも連れて行ってくださるでしょう」

「そうせき立てないでおくれ」と父は言った。「きっと行く。これで十分ではないか。お前たちも知っている通り、仕事をもっていると、時分をしばるわけにいかない。どんなことがおこって、時間と行動を要求するかわからないのだからね」

母は父を知りすぎるくらい知っていたので、それ以上せきたてはしなかった。父はいったんきめたことは変えない。母はこれで満足した。母も妹も父をこれほど喜ばせたスケッチを持ってきた私に感謝した。

「床もすばらしいものに違いない」と父は声をあげて言った。

「不完全な写生ではとてもあらわせないほど美しいのです」と私は言った。「ぼくの筆では木の繊維の輝きと柔らかな絹のような感じをとてもあらわせません。この床は非常に大切にされていて、フェルトの靴でしか歩けないのです」

「それは私にも想像できる」と父は答えた。「私にも想像できる」

（アーダルベルト・シュティフター、晩夏、第二巻、1拡大、藤村宏訳）

was man alles dort so liebt. が「この床は非常に大切にされていて」としか訳されていないのは、はなはだ物足りない。この was alles は、den Glanz und die Zartheit und das Seidenartige der Holzfasern すべてを指しているのだから、それを「この床は」だけで片づけるのは、いささか乱暴ではないだろうか。

(24)

LEONCE. Daß die Wolken schon seit drei Wochen von Westen nach Osten ziehen. Es macht mich ganz melancholisch.

HOFMEISTER. Eine sehr gegründete Melancholie.

LEONCE. Mensch, warum widersprechen Sie mir nicht? Sie haben dringende Geschäfte, nicht wahr? Es ist mir leid, daß ich Sie so lange aufgehalten habe. *(Der Hofmeister entfernt sich mit einer tiefen Verbeugung.)* Mein Herr, ich gratuliere Ihnen zu der schönen Parenthese, die Ihre Beine machen, wenn Sie sich verbeugen.

LEONCE *(allein, streckt sich auf der Bank aus).* Die Bienen sitzen so träg an den Blumen, und der Sonnenschein liegt so faul auf dem Boden. Es krassiert ein entsetzlicher Müßiggang. – Müßiggang ist aller Laster Anfang. – *Was die Leute nicht alles aus Langeweile treiben!* Sie studieren aus Langeweile, sie beten aus Langeweile, sie verlieben, verheiraten und vermehren sich aus Langeweile und sterben endlich aus Langeweile, und – und das ist der Humor davon – alles mit den wichtigsten Gesichtern, ohne zu merken, warum, und meinen Gott weiß was dazu. [...]

(Georg Büchner: Leonce und Lena, 1.Akt, 1.Szene)

レオンス　雲がもう三週間も西から東へ流れていくものね。あいつを見てるとまったく憂鬱な気持にさせられちまう。

ご教育係　まことにごもっともなご憂愁で。

レオンス　畜生、君はなぜ僕に反対しないんだね？ ああ、急いでいるのかい？ そいつは引きとめて悪かったね。（ご教育係、低く頭を下げて退場）君、君、君のお辞儀をするときのガニ股はみごとな括弧型だね。その括弧に敬意を表しとくぜ。

レオンス（ひとり、ベンチにからだを伸ばして）蜜蜂はだるそうに花にとまっている。お日さまの光はこれまたくたびれきって地面にころがってるな。恐るべき怠惰の大流行 ―怠惰こそなべての罪の始まりなり、か。人間のすることなすことはみんな退屈から始まってるのさ！ 退屈のあまり学問をする、退屈のあまりお祈りをする！ 退屈のあま

り惚れて結婚して繁殖する。そしておしまいに退屈のあまり死んじまうんだ、それに ― 何よりもユーモラスなのは ― こういうことを大真面目な顔してやってのけるってことさ。なぜかさっぱり分からないくせに、何やかやと理屈をくっつけてさ。[…]

（ゲオルク・ビューヒナー、レオンスとレーナ、第一幕、第一場、岩淵達治訳）

Was die Leute nicht alles aus Langeweile treiben! も典型的な感嘆文だが、岩淵訳の「人間のすることなすことはみんな退屈から始まってるのさ」も、感嘆文の体裁こそとってはいないものの、原文のニュアンスは十分に伝わってくる。

(25)

KLARA. Und wie wirds dann gemacht? *(Abwesend, ohne allen Anteil).*

SEKRETÄR. Darin sind die Temperamente verschieden. Einige arbeiten sich durch. Die kommen gewöhnlich in drei bis vier Jahren wieder ans Tageslicht, sind dann aber etwas mager und blaß, das muß man ihnen nicht übel nehmen. Zu diesen gehöre ich. Andere legen sich in der Mitte des Waldes nieder, sie wollen bloß ausruhen, aber sie stehen selten wieder auf. Ich habe selbst einen Bekannten, der nun schon drei Jahre im Schatten der Lex Julia sein Bier trinkt, er hat sich den Platz des Namens wegen ausgesucht, der ruft ihm angenehme Erinnerungen zurück. Noch andere werden desparat und kehren um. Die sind die Dümmsten, denn man läßt sie nur unter der Bedingung aus dem einen Dickigt heraus, daß sie sich spornstreichs wieder in ein anderes hineinbegeben. Und da gibts einige, die noch schrecklicher sind, die gar kein Ende haben! *(Für sich). Was man alles schwätzt, wenn man etwas auf dem Herzen hat und es nicht herauszubringen weiß!*

KLARA. Alles ist heute lustig und munter, das macht der schöne Tag!

(Friedrich Hebbel, Maria Magdalene, 2.Akt, 5.Szene)

クラーラー　そしてそれからどうするの。（放心して、少しも気乗りせずに言ふ。）

秘書　それは性によっていろいろだ。中には勉強して切り抜けるものもある。さういふ連中は大抵三年か四年でまた陽の眼を見るさ。だがそのときは幾分痩せて青白いが、それは悪く解してやっちゃいけない。僕もこの部類なんだ。他のやつは森のまん中で寝轉んぢゃって休息ばかりしたがるんだ。しかしかういふのは滅多に再び起つことはないなあ。僕の知合ひにももう三年もユーリア法典の木陰でビールを飲んでるやつがある。そいつはこのユーリアという女名前にひかされてその席を選擇したんだ。この名前がそいつに樂しい追憶を呼び起してくれるんだとさ。また他のやつは自暴になって引き返すんだ。これが一番馬鹿な連中だ、なぜってそいつらは大急ぎで他の藪に入って行くといふ条件でなきゃその一の藪から出してくれないからさ。もっとひどいのになると、まるでこれで終ひといふことがないんだ。（ひとり言で）胸に一物あってそれをどうして言ひ出したものか判らぬと、いろんなことを喋るものだな。

クラーラー　誰も彼もけふは面白さうで元気だこと、これは好いお天氣のせいですね。

（フリードリヒ・ヘッベル、マリーア・マグダレーナ、第二章、第五場、鼓常良訳）

昭和十五年（1940 年）の訳だが、Was man alles schwätzt, wenn man etwas auf dem Herzen hat und es nicht herauszubringen weiß! の鼓訳「胸に一物あってそれをどうして言ひ出したものか判らぬと、いろんなことを喋るものだな」は、was man alles schwätzt の意味を正確に把握している。

(26) „Also Traitors Gate muß ich sehn?“

„Unbedingt. Freilich, wenn ich dann wieder erwäge, daß an dieser berühmten Stelle nichts unmittelbar Wirkungsvolles zu sehn ist, so muß ich mich bei meinen Ratschlägen auf Ihre Phantasie verlassen können. Und ob das geht, weiß ich nicht. Wer aus der Mark ist, hat meist keine Phantasie.“ Der alte Graf und Armgard schwiegen, und auch Melusine sah wohl, daß sie mit ihrer

Bemerkung etwas zu weit gegangen war. Irgendeine Reparierung schien also geboten. „Ich will's aber doch mit Ihnen wagen“, nahm sie das Gespräch wieder auf und lachte. „Traitors Gate. Nun sehen Sie, Sie kommen da vom Eingange her einen schmalen Gang entlang, und mit einem Male haben Sie statt der grauen Steinwand ein eisenbeschlagenes Holztor neben sich. Hinter diesem Tor aber befindet sich ein kleiner, ganz unten in der Tiefe gelegener Wasserhof, von dem aus eine mehrstufige Treppe heraufführt und an eben der Stelle mündet, an der Sie stehn. Und nun rechnen Sie dreihundert Jahre zurück. Wem sich die Pforte damals auftat, um sich hinter ihm wieder zu schließen, der hatte vom Leben Abschied genommen... Es sind da, verzeihen Sie das Wort, lauter glibbrige Stufen, *und wer alles stieg diese Stufen hinauf:* Essex, Sir Walter Raleigh, Thomas Morus und zuletzt noch jene Clanhäuptlinge, die für Prince Charlie gefochten hatten und deren Köpfe, wenige Tage später, von Temple Bar herab, auf die City niedersahen.“

„Liegt, Gott sei Dank, weit zurück.“

(Theodor Fontane, Der Stechlin, 22.Kapitel)

「では、その反逆者の門も見ないといけないんですね？」

「ぜひとも。ただ、そうはいっても、この名だたる場所には直接効果満点の見世物があるわけじゃないことを考えると、お勧めするにはあなたの想像力があてにできないといけませんの。それがうまく行くかどうか。マルク出身の人ってたいてい想像力がないでしょう」老伯爵もアルムガルトも黙っていたので、メルジーネにも、いくらか言いすぎたことがわかってきた。なんとか修復する必要がありそうなのだ。「でも、あなたがお相手でしたら思いきってためしてみますわ」と、彼女は笑いながらまた口をひらいた。「さあ、反逆者の門ですけど、まず入口から細い通路に沿ってはいっていらっしゃるわけですが、そのうち突然、灰色の石壁にかわって鉄をかぶせた木の門がわきに見えてきます。そして、この門のうしろのずっと低い位置に小さな貯水池があって、そこから何段もの階段がちょうどあなたの立っていらっしゃる場所まで通じてますの。では、三百年前にさかのぼってください。当時その門があいて、うしろでまた閉まった人というのは、この世に

別れを告げた人たちなんです-----。そこの階段ときたら、こんな言葉を使ってごめんなさい、どれもこれもぬるぬるしてて、この階段をのぼっていった人というと、エセックス伯、サー・ウォルター・ローリー、トマス・モア、それからチャーリー王子のために戦った一味の頭目たちで、この連中の首はそれから数日、テンプル門の上からシティを見おろしたものでした」
「ありがたいことに、ずっと昔のことですね」
（テーオドア・フォンターネ、シュテヒリン湖、第二十二章、立川洋三訳）

「この階段をのぼっていった人というと、エセックス伯、サー・ウォルター・ローリー、トマス・モア、それからチャーリー王子のために戦った一味の頭目たちで」という平叙文の日本語では、wer alles stieg diese Stufen hinauf（なんとさまざまな人たちがこの階段を上っていったことか）という詠嘆調の響きが欠落してしまう恨みがある。

(27) [...] Die Sonne stieg höher; aber während die furchtbarste Hitze mich zu quälen anfing, verging die Zeit so langsam wie die Ewigkeit der Hölle. Weiß Gott, *was mir alles durch den Kopf ging*: ich verwünschte die Lydia, deren bloßes Andenken mich abermals in dieses Unheil gebracht, da ich darüber meine Waffe vergessen hatte. Hundertmal war ich versucht, allem ein Ende zu mahlen und auf das wilde Tier loszuspringen mit bloßen Händen; allein die Liebe zum Leben behielt die Oberhand, und ich stand und stand wie das versteinerte Weib des Lot oder wie der Zeiger einer Sonnenuhr; denn mein Schatten ging mit den Stunden um mich herum, wurde ganz kurz und begann schon wieder sich zu verlängern. Das war die bitterste Schmollerei, die ich je verrichtet, und ich nahm mir vor und gelobte, wenn ich dieser Gefahr entränne, so wolle ich umgänglich und freundlich werden, nach Hause gehen und mir und andern das Leben so angenehm als möglich machen. [...]
(Gottfried Keller, Pankraz der Schmoller)
［…］太陽はだんだん高く昇りました。恐ろしい暑熱に苦しめられか

けてからは、時のたつのがのろくて、まるで永遠の地獄のようでした。實にいろんなことが頭の中を通ってゆきました。わたしはリディアを呪いました。彼女のことを思い出したばかりに、鐵砲まで忘れて、またもこんな災厄につき落されたのですからね。何もかも一思いに片づけよう、素手で猛獣に飛びかかってやろうと、何度やりかけてみたか分りません。だが、生に對する愛着が勝を占めて、私はロートの鹽柱と化された妻か、日時計の針のように、立ちつくしていました。私の影法師は、時が移るにつれてぐるりと私のまわりを廻って、すっかり短くなり、次にまた長くなりはじめました。この間が、私が最もにがにがしいふくれっ面をした時です。私は、もしこの危険をのがれさえしたら、愛想のよい、おだやかな人間になろう、家へ帰って、自分のためにも他の者のためにも生活をできるだけ楽しいものにしようと、決心もし誓いもしました。[…]
（ゴットフリート・ケラー、ふくれっ面のパンクラーツ、関泰祐訳）

Weiß Gott, *was* mir *alles* durch den Kopf ging. の関泰祐訳は「實にいろんなことが頭の中を通ってゆきました」、was alles の微妙なあやをずばり捉えている。

(28) Es war, ich erinnere mich, im Salon der Prinzessin Mathilde, daß ich zum erstenmale von der „Frage“ hörte, die zur „schwebenden“ werden sollte.
Die Gesellschaft saß – nach dem Gabelfrühstück – auf der Terrasse, mit dem Ausblick nach dem Park. *Wer Alles da war?* Dessen kann ich mich nicht mehr entsinnen – nur zwei der anwesenden Persönlichkeiten sind mir im Gedächtnis geblieben; Taine und Renan. Die geistvolle Herrin von St. Gratien liebte es, sich mit litterarischen und wissenschaftlichen Größen zu umgeben.
(Bertha von Suttner, Die Waffen nieder!, 2.Band, 6.Buch)
わたしの記憶では、将来わたしにとって「懸案の」問題となるべきこの「問題」を初めて耳にしたのは、マティルデ王女のサロンでのことでした。

一座の人々は、昼時近くの朝食をすませたあと、広大な庭を前に、テラスに坐っていました。どんな人たちが居たかですって？ もう覚えていないわ。— ただそこに居た人たちのうちの二人だけが記憶に残っています。テーヌとルナンです。サン・グラシアンのあの才気溢れる御主人様であったマティルデ王女は、文学や学問で傑出した人たちをまわりに集めるのがお好きだったのです。
（ベルタ・フォン・ズットナー、武器を捨てよ、第二巻、第二章）

(29) [...] In der nächsten Zeit muß ich nun schnell promovieren; wärest Du vielleicht so gefällig eine Korrektur der sehr kurzen Dissertation *(Corollarium disput. de font. Laert.)* zu übernehmen? Meine Zeit ist mir sehr teuer geworden. Gott weiß, *was ich alles in den nächsten Monaten zu tun habe!* Schopenhauer lächelt ob dieses Stoßseufzers: denn was bringen wir Schächer mit unsrer *polypragmosynê* zustande!
(Friedrich Nietzsche, Brief an Erwin Rohde, 16. Januar 1869)
近いうちに僕は急いで学位をとらねばならない。きっと君は僕のごく短い学位論文（ラエルティオスの原典についての小論）の校正をよろこんで引き受けてくれるだろうね。僕には時間がとても大切になったのだ。この数ヶ月のうちに、どれだけのことを僕がしなければならないか、誰にもわかりゃしないのだ。ショーペンハウアーが僕のことを長大息に微笑することだろう。僕たち哀れな人間が、どんなに多忙をきわめて働こうとも、なにをなしとげられよう？
（フリードリヒ・ニーチェ、エルヴィーン・ローデ宛の書簡、1869年1月16日、塚越敏訳）

(30) „*Und was kannst du denn schon alles*, du kleiner Mann?“ fragte sie zu guter Letzt.„Ich kann pfeifen!“ erwiderte er stolz.
Die freundliche Frau lachte ganz laut nd sagte: „Nun, dann pfeif uns einmal eins!“
Er spitzte die Lippen und versuchte zu pfeifen, aber es ging nicht, er hatte es wieder verlernt.

Da lachten sie alle, die freundliche Frau, das kleine Mädchen und selbst die Mutter; ihm aber stiegen vor Scham die Tränen in die Augen, er schlug mit Händen und Füßen um sich, so daß die Dame ihn vor ihrem Schoße gleiten ließ, und die Mutter sagte verweisend: „Du bist ungezogen, Paul!“

(Hermann Sudermann, Frau Sorge, 4.Kapitel)

「ところであなたは、どんなことがお出來になるの？」最後にかう彼女は聞いた。

「口笛が吹けるよ」、彼は得意になって答へた。

やさしい小母さんは高い聲で笑って、「それぢゃ、何か一つお聞かせくださいな。」

彼は唇を尖らせて口笛を吹かうとした、が、鳴らなかった。— 彼はいつしか鳴らしかたを忘れてゐたのである。

それで皆が笑ってしまった。やさしい小母さんも、小さな少女も、母さへも。けれども彼の眼には、恥しさの餘り涙がにじんだ。彼は手足をばたばたさせて藻掻(もが)いたので、小母さんは彼を膝から辷り落した。

「あんまりお行儀が悪いよ、パウル！」

（ヘルマン・ズーデルマン、憂愁夫人、第四章、相良守峯訳）

Was kannst du denn schon alles? を文字どおりに訳せば、「おまえはすでにどんないろいろなことが出来るのか？」ということである。

(31)

FRAU HEINECKE. Das arme Kind!

ALMA. O yes, Ma! Ich hab nämlich auch englisch gelernt! Ich bin nämlich furchtbar gebildet!... *Was i c h alles weiß!*

HEINECKE Ja woll! Siehste!

ALMA. Und überhaupt!... Man lebt nur einmal... Lust sein ist die Hauptsache... Bist du auch lustig, Brüderchen?

ROBERT. Gewiß. Wenn ich Grund dazu habe.

(Hermann Sudelmann, Die Ehre, 1.Akt, 8.Scene)

ハイネッケの妻　可哀相に。

アルマ　O Yes, Ma! あたし、英語も覺えてよ。あたし、大變学問してよ … 何でも知ってるわ。

ハイネッケ　全くだ。

アルマ　大體、此の世は二度ないわ… 面白く暮らすのが一番なの… 兄さんも、面白くって。

ローベルト　さう、面白い事がありゃね。

（ヘルマン・ズーデルマン、名譽、第一幕、第八場、木村謹治訳）

Was i c h alles weiß! の木村訳「何でも知ってるわ」は、まさにそのとおりだが、ich が隔字体になっていることを考慮すれば、「このわたしって、何でも知ってるのよ」ぐらいの感じではないだろうか。

(32)

FRAU SCHWARTZE. Und gestern sind noch ein halbes Dutzend Koffer aus dem Hotel gekommen. Und ebensoviel sind noch dort — Ach, *was da alles drin war!* Ein Koffer allein für die Hüte! Und Pudermäntel ganz von echten Spitzen – und durchbrochene Strümpfe mit Goldstickerei und – *(leiser)* seidene Hemden –

FRANZISKA. Was? Seidene — ?

FRAU SCHWARTZE. Ja!

FRANZISKA *(die Hände über dem Kopf zusammenschlagend)*. Das ist ja Sünde!

(Hermann Sudelmann, Heimat, 3.Akt, 1.Scene)

シュワルツェ夫人　それから昨日ホテルから大鞄が五つ六つ來てねえ、まだあとにそれ位残ってゐるといふのだが、一體何が這入ってゐるのだらう！ 一つの鞄なんか、一杯に帽子ばかり！ それからすっかり本當の手編レースをかけた仕度服だの！ 金絲のぬひをした透しの靴下だの —（小声で）絹の肌襦袢だの —

フランチスカ　え？絹の —　？

シュワルツェ夫人　えゝ！

フランチスカ（頭の上で手を拍ち）さうなると、罪悪ですよ！

（ヘルマン・ズーダーマン、故郷、第三幕、第一場、島村抱月訳）

かの「カチューシャの唄」で一世を風靡したといわれる松井須磨子とも因縁浅からぬ島村抱月にこのような翻訳があろうとは、筆者も最近までまったく知らなかったが、訳者自身の序言によれば、原作の英訳と「藤澤古雪君の邦譯をも参照した」とある。ところで感嘆文 Was da alles drin war! の抱月訳「一體何が這入ってゐるのだらう」は、残念ながら完全な誤訳で、正しくは、ホテルから運ばれてきた半ダースほどのトランクを開けて見たところ、「なんとまあさまざまなものがその中に詰め込まれていたことだろう」との驚きの表現である。

(33)

Stubenmädchen *(tritt ein)*. Der Wagen ist da, Herr Professor. *(Ab.)*

Wegrat. Ich komme schon. *(Zu Julian.)* Du hast mir viel zu erzählen. Du warst ja so gut wie verschollen. Es interessiert mich natürlich zu wissen, *was du alles gemacht hast* – und noch mehr, was du vorhast. Felix sprach uns von einigen sehr interessanten Entwürfen, die du ihm gezeigt hast.

Julian. Ich begleite dich, wenn dir recht ist.

Wegrat. Danke. Aber noch freundlicher wäre es von dir, wenn du gleich bei uns bliebst und mit uns zu Mittag speisen wolltest.

Julian. Nun...

(Arthur Schnitzler, Der einsame Weg, 3.Akt, 7.Szene)

小間使（はひって來る）旦那さま、お馬車が參りました。（出て行く）

ウェークラート　あゝ、すぐ行くよ。（ユリアンに）君にはいろいろ聞きたい話がある。何しろ行方不明も同様な人だったのだから。それまでにはどんなことをいろいろやってゐたか、またこの先もどんな事をするつもりか、聞きたいのは當り前だろうぢゃないか。フェーリックスは、君に非常に面白いスケッチを見せてもらったといってゐたよ。

ユリアン　お差支へがなければ、一緒に出かけようか。

ウェークラート　有難う。だがこのまゝゐてくれて、晝食をたべて行って貰へると、もっと有難いのだ。

ユリアン　でも……

（アルトゥール・シュニッツレル、寂しい道、第三幕、第七景、楠田正雄訳）

Es interessiert mich natürlich zu wissen, was du alles gemacht hast – und noch mehr, was du vorhast. の楠田訳は「それまでにはどんなことをいろいろやってゐたか、またこの先もどんな事をするつもりか、聞きたいのは當り前だろうぢゃないか」。後半の und noch mehr を完全な文の形に復元すれば、und es interessiert mich noch mehr, was du vorhast だから、正確に訳せば、「ぼくにとってもっと興味があるのは、きみがこれからどんなことをするつもりか、ということなのだ」、となるが、そのような瑕瑾をあげつらうよりは、ドイツ語の専門家でもなければドイツ文学者でもなかった訳者の読解力の高さに、素直に驚くべきだろう。因みにこの翻訳が収められている一冊本の『シュニッツレル選集』は、戯曲 5 篇を楠山正雄、小説 5 篇を山本有三がそれぞれ担当して翻訳し、初版二千五百部の印税に相当する四万マルクを、第一次世界大戦直後の当時、金銭的に苦境にあった原作者に贈呈するという、いわくつきのもので、それに対するシュニッツラーからの礼状が、口絵写真として使われている。 この写真を目にして驚いたのは、私的なことでまことに恐縮だが、礼状の日付が 28.5.1922 だったことだ。実は筆者が生まれたのがちょうどその一ヶ月前で、この手紙が書かれたときにはまだ生後一ヶ月の赤ん坊、当時の先輩たち（山本有三 35 歳、楠山正雄 38 歳）の実力のほどを、まざまざと見せつけられる思いだった。

(34)

MAUER. Ich bitt’ dich, ein Künstler! Die sind alle mehr oder weniger anormal. Schon daß sie sich so wichtig nehmen. Der Ehrgeiz an und für sich ist ja eine Geistesstörung. Dieses Spekulieren auf die Unsterblichkeit! Und die reproduzierenden Künstler, die haben’s gar schlecht. Sie mögen so groß sein, wie sie wollen, es bleibt doch nichts übrig als der Name und nichts von dem, was sie geleistet haben. Ich glaub’ schon, daß einen das verrückt machen kann.

FRIEDRICH. Aber was redst denn! Du hast ihn ja nicht gekannt. Ihr habt ihn ja alle nicht gekannt. Ehrgeiz ... Der? – Dazu war er ja viel zu gescheit! Zu philosophisch könnt' man sagen. Die Klavierspielerei war ihm in Wirklichkeit Nebensache. Habt ihr denn eine Ahnung, *für was alles der sich interessiert hat?* Den Kant und den Schopenhauer und den Nietzsche hat er im kleinen Finger gehabt, und den Marx und den Proudhon gleichfalls. Es war ja fabelhaft. Ich weiß schon, wen ich mir aussuch' zum Konversieren ... Und dabei täglich sechs Stunden üben! Wo er nur die Zeit zu dem allen hergenommen hat? – Und siebenundzwanzig Jahre! Und bringt sich um. Herr Gott, *was hat so ein Kerl noch alles vor sich gehabt*. Jung und berühmt, ganz hübsch obendrein – und schießt sich tot. Wenn das ein alter Esel tut, dem das Leben nichts mehr bieten kann ... Aber grad die ... Na. – Und noch am Abend vorher sitzt man zusammen mit so einem Menschen, beim Nachtmahl – und spielt Billard mit ihm ... Was ist denn, Genia? Was ist denn da zum Lachen?

(Arthur Schnitzler, Das weite Land, 1.Akt)

マウエル　いいや、大した藝術家になってゐたらうよ！ 藝術家なんてものは、どうせ何處かアブノオマルなところがあるもんだ。自惚の強いのなんか、確にそれだよ。名を賣りたがるのからして、そもそも變だよ。あはよくば、不朽の名作を殘さうなんて考へてるんだからね！ 中でも、俳優、歌うたひのたぐひが、一番みぢめだよ。どんなに豪(えら)くなったって、後世に殘るのは評判ばかりで、自分の爲事(しごと)は跡方もなく消えてしまふんだからねえ。さう思っただけでも、奴(やっこ)さん達、氣が變になるだろうからねえ。

フリイドリヒ　君らしくもない事を言ふぢゃないか！ ぢゃあ君には、あの男の値打がちっとも分かってゐないんだ。君達の仲間には、どうせあの男の値打は分からないんだ。名を賣ったっていふのかい…あの男が？ — 可哀さうに、それほど莫迦でもなかったらうよ！ それほど俗物でもなかったらうよ！ ピアノを彈くのは、謂はば奴の道樂だったのさ。君達が何を知るもんか、あれほど趣味の廣い男はありゃしないよ。カント、ショオペンハウエル、ニイッチェなんかは勿論のこと、マルクスやプルウドンまで卒業してゐたんだ。まるで嘘みたいな話だ

よ。僕だって、そんなつまらない人間なら話相手にする筈がないぢゃあないか…それだけの勉強をした上で、あいつ毎日六時間づつピアノの稽古をしてゐたんだよ！ どうして、僅かの時間にああ何もかもやれたもんだらうねえ？ ― 年だって、まだ二十七かそこらだ！ 惜しい人を殺したよ。生きてゐたら、あの男、どんな事を爲出來したか分からないんだ。若くって、有名で、男っぷ振りが好くって― 何が不足で、自殺なんかしたんだらうね。この世に思ひ殘すことのない耄碌爺なら兎も角も… あの若さでさ… ねえ、君 ― 全く人事とは思へないよ、僕は前の晩に一緒に食事をしたり球を撞いたりしたんだから…何だい、ゲニア？ 何がおかしいんだ？

（アルトゥール・シュニッツレル、廣い國、第一幕、久保榮訳）

Habt ihr denn eine Ahnung, für was alles der sich interessiert hat? の訳は「君達が何を知るもんか、あれほど趣味の廣い男はありゃしないよ」、いまから80年も前の、しかもいまだ三十に手の届かぬ若き演劇人久保榮の手になる見事な訳業、驚くほかはない。

(35)

ANNCHEN. Warum, Hanschen? Warum kannst du nicht immer hierbleiben?

HANS *(traurig)*. Ja, spaß man noch, Annchen! Mir ist gar nicht so zumut.

ANNCHEN *(hartnäckig)*. Du bliebst h i e r und lernst Polnisch und hilfst dem Onkel in der Wirtschaft. Wir haben hier auch genug zu tun, wenn wir wollen. Und nachher läßt du dir von deinen Eltern Geld geben und kaufst dir ein Gut hier. Dann gehtst du gar nicht weg. Dann sind wir immer zusammen.

HANS *(aufgeregt)*. Und meine Eltern! Und meine Zukunft! Und alles! Ach, Annchen! Annchen! Wenn du wüßtest, wie schwer mir das... Wär' ich doch bloß nicht gekommen! Hätt' ich nie was von Rosenau gesehen!

ANNCHEN *(eigensinnig)*. Du kannst uns auch was zuliebe tun. Wir sind dir so gut, und du...

HANS *(in seinen Gedanken)*. Ich hab' mir ja noch soviel vorgenommen. Ich kann doch nicht hier sitzen! Wenn ich so denk', *was ich noch alles*... All die

Zukunft“ All das aufgeben! Und ich hab’ mir das so schön ausgemalt! Das war ja mein einziger Gedanke auf der Schule, wenn ich erst raus bin, *was man da alles erleben wird!* Und das alles... *(Preßt verzweifelt den Kopf in die Hände)*

(Max Halbe, Jugend, 2.Aufzug)

アンヘン　どうして、ハンスさん、どうしてここにいられないの。

ハンス（悲しげに）いくらでものんきなことをいっていたまえ、アンヘン。僕はそんな気持ちにはなれないんだ。

アンヘン（執拗に）あんたはここにいらしって、ポーランド語を習って、伯父さまのご用を手伝ってお上げになればいいわ。ここには、しようと思えば、いくらでも仕事があってよ。そして、あとでご両親からお金を送ってもらって、ここで広い土地をお買いなさいな。そうしてずうっとここにいらしって、みんなで一緒に暮らしましょう。

ハンス（興奮して）そしたら僕の両親は。僕の未来は。すべてのものは。ああ、アンヘン、アンヘン。僕のつらい気持がわかってもらえたら。……僕はやっぱり来なきゃよかったんだ。ローゼナウのものを見なきゃよかったんだ。

アンヘン（かたくなに）ちっとは、あたしたちのいうことも聞いて下さるものよ。あたしたちはそれはあんたのことを思ってるの……

ハンス（考えこんで）僕はまだ、いろんなプランを持っているんだ。僕はどうしたってここにいるわけにはいかない。この上いろんなことを…… いっさいの未来を、みんなあきらめるなんて。僕はそれらを美しく描いていたんだ。学校にいた時、ここを出たら、どんなにいろんなことにぶつかるだろうと、そのことばかり考えていたんだ。だのに、それらのすべてを……（絶望的に頭を両手の中へ押しつける）

（マックス・ハルベ、青春、第二幕、番匠谷英一訳）

(36)

FRAU DOORN *(zu Peter)*. Hat der Prediger schön gepredigt?

PETER. Ich weiß nicht. Ich hab nicht hingehört.

FRAU DOORN. Über was ist denn die Predigt gegangen?

RENATE *(nach kurzem Schweigen)*. Über den Kindermord von Bethlehem.

FRAU DOORN. *Über was sie auch heutzutage alles predigen!*

PETER. Ja, als wenn's nicht schon Unglück genug gibt in der Welt! Muß man auch noch in der Predigt daran erinnert werden!

(Max Halbe, Der Strom, 1.Aufzug)

ドールン夫人（ペーターにむかって）牧師の説教はよかったかね？

ペーター　どうですかね。聞いていませんでしたから。

ドールン夫人　説教のテーマは？

レナーテ（しばし黙したのち）ベツレヘムの嬰児虐殺でした。

ドールン夫人　近頃ではなんでもかんでも説教のテーマにするんだね。

ペーター　ええ、この世はもう不幸だらけだというのに！ おまけに説教でまで、そのことを考えろっていうんですかね。

（マックス・ハルベ、河、第一幕）

(37) [...] Die jungen Wesen liefen und bedienten ihn, der Tafeldecker legte vor. Andere kamen herein, sie gaben dem Vorschneider ihre Schüsseln ab, sie kreuzten einander, aber nie stieß einer an den andern. Der Küchenmeister lenkte alle mit seinem scharfen dunklen Blick. Es waren noch andere da, Unsichtbare, wie Schatten, die ihnen aus dem Dunkel die Schüsseln reichten; man hätte nicht sagen können, *wer alles im Zimmer war und wer nicht*. Sie knieten wechselnd mit den Schüsseln zu seiner Linken und Rechten, jetzt kam ein kleines Mädchen an die Reihe. Das Kind trug eine schwere goldene Schüssel und konnte sie kaum erhalten; mit angespanntem Ernst zwang sie sich, nicht zu zittern.

(Hugo von Hofmannsthal, Die Frau ohne Schatten, 4.Kapitel)

［…］年少の男の子たちが走り寄ってきて、給仕をした。食卓つきの少年が料理を勧めた。 他の人びとも入ってきた。彼らは給仕の少年に各(おのおの)の皿をわたしてから、縦横に自分の席に散っていったが、誰も他人と衝突したりすることもない。主膳の頭(かみ)は鋭い陰鬱な眼光で、一同を取りさばいている。そして、席にはそのほかにもまだ、影のように眼に見えない者たちもいて、客人に暗がりのなかから皿をわたしてい

るのだった。いったいこの広間のなかにいたのは、みな何ものであったのか、何ものでなかったのか、言おうとしても、言うことはできなかっただろう。彼らは交互に皿を捧げてきては帝の左右に跪いたが、今度は若い女の児の順番になった。この女の児は重たそうな黄金造りの皿を捧げていたが、ほとんどそれを支えきれなかった。緊張して懸命に、女の児は震えまいと努めていた。
（フーゴー・フォン・ホーフマンスタール、影のない女、第四章、高橋英夫訳）

本稿をここまで読んでこられた読者には、これ以上説明するまでもないだろうが、wer alles im Zimmer war und wer nicht は「この広間にはどのような人々がいたのか、あるいはいなかったのか」ということであるから、高橋訳「いったいこの広間のなかにいたのは、みな何ものであったのか、何ものでなかったのか」にある「みな」は、alles の本来の意味である「すべての」「あらゆる」にとらわれすぎた誤訳である。

(38) [...] Nur gut, wenn Settembrini bei diesen Reden nicht zugegen war! Er gab sonst nur wieder den störenden Drehorgelmann ab und schalmeite Frieden, – obgleich da doch der heilige National- und Zivilisationskrieg gegen Wien war, zu dem er durchaus nicht nein sagte, während freilich Naphta nun gerade diese Passion und Schwäche mit Hohn und Verachtung strafte. Wenigstens solange der Inaliener von solchen Gefühlen warm war, führte er eine christliche Weltbürgerlichkeit dagegen ins Feld, wollte jedes Land, und auch wieder kein eiziges, Vaterland nennen und wiederholte schneidend das Wort eines Ordensgenerals namens Nickel, dahin lautend, die Vaterlandsliebe sei „eine Pest und der sicherste Tod der christlichen Liebe“.
Versteht sich, es war die Askese, um derentwillen Naphta die Vaterlandsliebe eine Pest nannte, – *denn was begriff er nicht alles unter diesem Wort, was alles lief nicht nach seinem Erachten der Askese und dem Gottesreiche zuwider!* Nicht nur die Anhänglichkeit an Familie und Heimat tat das, sondern auch die an Gesundheit und Leben: sie eben macht er dem

Humanisten zum Vorwurf, wenn dieser Frieden und Glück schalmeite; der Fleischesliebe, der amor carnalis, der Liebe zu den körperlichen Bequemlichkeiten, commodorum corporis, zieh er ihn zänkisch und nannte es ihm ins Gesicht hinein stockbürgerliche Irreligiosität, auf Leben und Gesundheit auch nur gerinste Gewicht zu legen.

(Thomas Mann, Der Zauberberg, 6. Kapitel, OPERATIONES SPIRITUALES)

[…] セテムブリーニがこういう話の時に居合さないのは幸いだった。そうでなければ、彼はまたしても箱オルガン弾きの役割を演じて一座をかき乱し、平和の牧笛を奏でたことであろう。― おりからイタリア人の神聖な民族戦争と文明戦争が、ウィーンに対して行われていたにもかかわらず、セテムブリーニはこの戦争に対して決して否を唱えることがなかった。まさしくこの情熱と弱点こそナフタが嘲笑と軽蔑とによって罰したものであった。少なくともこのイタリア人がこういう感情に熱しているのを見ると、ナフタはそれに対してキリスト教的世界市民主義で対戦し、どの国をも祖国と呼びことによってどの国をも祖国とせず、ネッケルというイェズス会の将軍の言葉、祖国愛は「ペストであり、キリスト教的愛の最も確実な死である」という言葉を断乎たる口調で繰返すのであった。ナフタが祖国愛をペストと呼んだのは、「禁欲」のためであることはむろんである。― なぜなら、彼はペストという言葉に人間存在のすべてを包括しようとしたのではなかったか。彼の考えではすべてが禁欲と神の国に違反するものではなかっただろうか。家族や故郷への愛着がそうであったのみならず、健康と生への愛着も。人文主義者が平和と幸福を奏でると、ナフタはまさしくその健康と生への愛着を非難した。ナフタは人文主義者の肉の愛、肉体的快楽への愛を口喧しく咎めだてし、生と健康に少しでも重きを置くのは完全に市民的な不信仰だと、面と向ってきめつけた。

（トーマス・マン、魔の山、第六章「精神錬成」、高橋義孝訳）

冗語のnichtにも見られるように、Was begriff er nicht alles unter diesem Wort! もWas alles lief nicht nach seinem Erachten der Askese und dem Gottesreiche zuwider! も、ともに感嘆文である。「彼はペストという言葉に

人間存在のすべてを包括しようとしたのではなかったか。彼の考えではすべてが禁欲と神の国に違反するものではなかっただろうか」という疑問文風の高橋訳が適訳か否かは、読者自身の判断に任せたい。

(39) [...] War man im Sommer und Herbst meistens schweigend draußen umhergegangen, jeder für sich suchend, findend und lauschend, so kam nun eine Zeit der Gespräche und der Auseinandersetzungen, die sich oft in dem vom Qualm der langen Pfeifen ganz unwegsam gewordenen Zimmer weit in die stürmische Nacht hinein ausdehnten. *Was wurde da nicht alles erörtert!* Die Eindrücke des Sommers stiegen auf, wurden verglichen, geprüft, aneinandergehalten. Man suchte sich klar zu werden, was an diesem und jenem Motiv das Zwingende, das Überzeugende war. Weshalb es wirkte und worin seine Wichtigkeit lag. Man gedachte Böcklins, der das Tiefste und Wesentlichste aus der Natur herausholte und der es so selig zu sagen verstand. Erinnerungen aus Rembrandt stiegen auf und verbanden sich damit; die Landschaft in Braunschweig mit dem großen Gewitter und die Radierungen, vor allem diese. Und wenn man, ganz erschöpft von Gesprächen, nicht mehr weiter konnte, las man. Man las Bücher aus Norden. Björnson besonders. Der schien etwas Verwandtes zu haben. [...]
(Rainer Maria Rilke, Worpswede, Fritz Mackensen)
［…］夏や秋の間はみんな思い思いに探したり、見つけたり、耳を傾けたりしながら、黙りこくって外を歩きまわったものだったが、いまは談話と対決の時がやって来て、それはしばしば、長いパイプのくゆらす煙のためにすっかりあやめも分らなくなった部屋のなかから、遠く荒れ模様の夜のなかにまでもふくらんでゆくのだった。何ひとつ討議をつくされない問題はなかった！ あまたの夏の印象がたちのぼってきて、比較され、検討され、つきあわされた。あれこれの主題がもつあの強制的なもの、否定できないものが何であるかということを明らかにしようとする努力が行われた。なにゆえにそれは作用しえたのか、またどこにその重要性がひそんでいたのか。自然から最も奥深いもの最も本質的なものを取り出して、それをいとも幸福そうに物語る

すべを心得ていたベックリリンのことが思いおこされた。レンブラントからの記憶がたちのぼってきて、これと結びついた。壮大な嵐をはらんだブラウンシュヴァイクの風景画と、エッチング、とりわけ後者がまざまざと思い出された。そして談話にすっかり疲れはてて、一歩も先へ進むことができなくなると、今度は書物を読んだ。読まれたのは北欧の書物だった。特にビヨルンソンだった。この作家は何か自分たちと近縁のものを持っているように思われた。[…]
（ライナー・マリーア・リルケ、ヴォルプスヴェーデ、フリッツ・マッケンゼン、吉村博次訳）

Was wurde da nicht alles erörtert! は、冗語の nicht を見ても明らかなように、「そこではいかにさまざまなことが討議されたことか」という典型的な感嘆文であり、「何ひとつ討議をつくされない問題はなかった」という平叙文風の吉村訳には、いささかのずれを感じざるを得ない。

(40) [...]K. sah schweigend zu, wie sie den Strickstrumpf wieder vornahm. Sie scheint sich zu wundern, daß ich davon spreche, dachte er, sie scheint es nicht für richtig zu halten, daß ich davon spreche. Desto wichtiger ist es, daß ich es tue. Nur mit einer alten Frau kann ich davon sprechen.
„Doch, Arbeit hat es gewiß gemacht“, sagte er dann, „aber es wird nicht wieder vorkommen.“ „Nein, das kann nicht wieder vorkommen“, sagte sie bekräftigend und lächelte K. fast wehmütig an. „Meinen Sie das ernstlich?“ fragte K. „Ja“, sagte sie leiser, „aber vor allem dürfen Sie es nicht zu schwer nehmen. *Was geschieht nicht alles in der Welt!* Da Sie so vertraulich mit mir reden, Herr K., kann ich Ihnen ja eingestehen, daß ich ein wenig hinter der Tür gehorcht habe und daß mir auch die beiden Wächter einiges erzählt haben. Es handelt sich ja um Ihr Glück und das liegt mir wirklich am Herzen, mehr als mir vielleicht zusteht, denn ich bin ja bloß die Vermieterin. [...]“
(Franz Kafka, Der Prozeß, 1.Kapitel)
［…］Kは彼女はまた靴下をとりあげるのを黙って見ていた。こんなことを話すのを、不思議に思っているようだな、こんなことを話すの

は、かんばしからぬことだと思っているようだ、と彼は考えた。いや、だからこそ話してやることがますますもって重要なのだ。年をとった女としか話せない事柄なんだから。

「いや、たしかにお手数をかけましたよ」と彼は言い、「しかし二度とふたたびあんなことは起こらないでしょう」

「そうですとも、二度と起こることじゃありませんよ」

と彼女は断言するように言い、ほとんど悲しそうな表情でKにほほえみかけた。

「本気でそうお思いですか？」とKはたずねた。

「ええ」と彼女は声を低め、「でも何はともあれ、あなたはあんなことをあまり重要にとりすぎてはいけませんわ。この世の中ではほんとにどんなことが起こるかわかりませんものね！Kさん、あなたがうちとけた話し方をなさるので、私のほうもかくしだてしないですむんですが、じつは私、ドアのうしろで少し盗み聞きもしましたし、それに二人の監視人が少々話してもくれたんです。だってあなたのお幸せに関することですし、あなたのお幸せこそほんとうに私が心から願っていることですもの。きっと柄にもないことかもしれません、何しろ私はただあなたにお部屋を貸しているだけの女ですからね。[…]」

（フランツ・カフカ、訴訟、第一章、辻瑆訳）

Was geschieht nicht alles in der Welt! に対応する訳文「この世の中ではほんとにどんなことが起こるかわかりませんものね」は、読者に原文の味を見事に伝えてくれる。「ほんとに」の一句の効果というべきか。

(41) [...] Jetzt brach die Meute los. Keine Formation wollte sich von ihren Zimmer-, Büro- und Kasino-Möbeln trennen. Diplomatenschreibtische, lederne Klubsessel, Teppiche, Fenstervorhänge aus schwerem Plüsch – alles schleppten Lastautos öffentlich, am hellen Tage zum Bahnhof. *Was alles aus den Quartieren der Offiziere und höhern Beamten gestohlen worden ist*, spottet jeder Beschreibung. Die Wäscheschränke waren schon lange leer. Tische, Stühle, Betten, Eßgeschirre, Bestecke und Uhren wanderten nach.

Selbst Bade-Einrichtungen sind ausgebrochen und mitgenommen worden. [...]

(Kurt Tucholsky, Militaria)

［…］いまや彼らは暴徒と化した。どの編成部隊に所属する者たちも、部屋の、事務室の、酒保の家具類を持ち去ろうとした。豪華な事務机、革製の安楽椅子、絨毯（じゅうたん）類、分厚いプラッシュのカーテン ― 何もかもすべてが、白昼人目も憚らずにトラックで駅に向かって運び去られた。士官たち、高級官僚たちの宿舎から、いかにさまざまなものが盗み出されたか、それはまさに形容を絶するものだった。下着類の戸棚もとっくに空っぽ。机、椅子、ベッド、食器類、ナイフ・フォーク・スプーン、そして時計が後に続いた。浴室のさまざまな設備すらもが剥ぎ取られ、持ち去られた。

（クルト・トゥホルスキー、ミリタリア）

(42)

DER ERSTE SA-MANN　Wo verwahren Sie denn das Haushaltungsbuch, junge Frau?

DER ZWEITE SA-MANN　*Und wem zeigen Sie denn das Haushaltungsbuch alles?*

DIE JUNGE FRAU　Es ist nur zu Hause. Ich zeig es niemand.

DIE ALTE FRAU　Das können Sie ihr doch nicht übelnehmen, daß sie ein Haushaltungsbuch führt, nicht?

(Bertold Brecht, Furcht und Elend des Dritten Reichs. 18 Winterhilfe)

突撃隊員１　その家計簿はどこにしまってあるのかね、奥さん？

突撃隊員２　その家計簿を誰に見せてまわってるんだね？

若い女　うちにしまってあって誰にも見せたりやしません。

老婆　まさかこの子が家計簿をつけてるのがいかんなんておっしゃいませんよね？

（ベルトルト・ブレヒト、第三帝国の恐怖と悲惨、18 冬期救援、岩淵達治訳）

まず *Wem* zeigen Sie denn das Haushaltungsbuch *alles?* の語順に注目していただきたい。本来は wem にかかるはずの alles が（*Wem alles* zeigen Sie denn das Haushaltungsbuch?）、文頭の wem からもっとも遠いところにある文末に置かれる、という興味深い例だが、日常の言葉ではこのような語順もけっして珍しくはないことを知っておくべきだろう。引用例（14）の Wen alles? のところでも言及したが、wer と alles の組み合わせを適当な日本語に翻訳することは容易ではない。岩淵訳の「その家計簿を誰に見せてまわってるんだね？」は、「見せる」ではなく、「見せてまわる」という表現によって、この問題をたくみに解決している。

(43) [...] „Er ist der beste Untermieter, den wir je gehabt haben, und nie gab's Geschichten mit Damen oder so!, versicherte Frau Schönler.

Bärlach ging zur Türe: „Hin und wieder werde ich einen Beamten schicken oder selber kommen. Schmied hat noch wichtige Dokumente hier, die wir vielleicht brauchen."

„Werde ich von Herrn Schmied eine Postkarte aus dem Ausland erhalten?" wollte Frau Schönler noch wissen. „Mein Sohn sammelt Briefmarken."

„Aber Bärlach runzelte die Stirne und bedauerte, indem er Frau Schönler nachdenklich ansah: „Wohl kaum, denn von solchen dienstlichen Reisen schickt man gewöhnlich keine Postkarten. Das ist verboten."

Da schlug Frau Schönler aufs neue die Hände über dem Kopf zusammen und meinte verzweifelt: „*Was die Polizei nicht alles verbietet!*"

Bärlach ging und war froh, aus dem Hause hinaus zu sein.

(Friedrich Dürrenmatt, Der Richter und sein Henker)

「あの方はいままでうちにいらっしゃった下宿人でいちばんいい方でしたわ。女出入りなんぞといったことは、ついぞありませんでしたし……」と夫人は力をこめて言った。

ベールラッハは帰りかけた。「時々、巡査を寄越したり、私自身が来たりします。シュミートはひょっとすると我々に必要となる書類をまだここにおいておりますからね」

「シュミートさんから外国のお葉書をいただけるでしょうか？ 息子

が切手を集めておりますので」と夫人はなお聞きたがった。
だがベールラッハは額をしかめ、夫人の顔を残念そうに眺めながら言った。「まあ駄目でしょうよ。このような出張の際、ふつう手紙は出さないものです。禁じられていますからね」
夫人はこれを聞くとまた頭の上で手をうちあわせてがっかりして叫んだ。「まあ警察が禁止しないことなんかありませんのね！」
ベールラッハは、かまわずに先にすすみ、その家から、外へ出たとき、ほっとした。
（フリードリヒ・デュレンマット、裁判官と死刑執行人、前川道介訳）

Was die Polizei nicht alles verbietet! は「警察ってとこは、何でもかんでも禁止するんですねえ」という Frau Schönler の皮肉たっぷりの捨て台詞である。

(44)
BETTY Wir werden uns noch erkälten.
NOAH Ein geringer Preis für diese Schätze.
BETTY..Aber du hast doch nun schon den größten Teil deiner Sammlung oben und ich habe dir wirklich...
NOAH Nur diese Kiste.
BETTY Noah, glaub mir, sie ist zu schwer.
NOAH Es sind sicher erlesene Stücke dabei; die burgundischen, weißt du?
BETTY Das kannst du gar nicht wissen. *Genau so könnte auch ich weiß nicht was alles drinnen sein.*
[...]
(Günter Grass, Hochwasser, 1.Akt)
ベティ　こんなことしてたら、風邪を引いてしまうわ。
ノア　この宝物に比べたら、どうってことないさ。
ベティ　でもあなたのコレクション（筆者注：インク壺のコレクション）、大部分もう上に移動させたじゃないの、ねえ、ほんとうに……

ノア　あとこの箱だけだから。
ベティ　ノア、あたしたちには重すぎるったら。
ノア　この中にはきっと極上品が入っているんだ、ブルグンドのものとかさ。
ベティ　そんなこと、分かりっこないわ。何だか知ならいけど、がらくたばかり詰まってるかもしれないじゃない。
［…］
（ギュンター・グラス、洪水、第一幕）

以上で本稿を終えるが、諸々の訳文を改めて読み返してみると、明治、大正、昭和前期の先輩たちのほうが、むろん例外はあるにせよ、本稿の主題であるallesのニュアンスをはるかによく理解していたように思えてならない。筆者の思い過ごしだろうか。残念なことだが、戦後から現在にかけての翻訳家たちの讀解力は、明治、大正、昭和前期に比べると、むしろ退歩しているのではないだろうか。

（慶應義塾大学名誉教授）

（出典著者一覧表）
Bauernfeld, Eduard von (1802-90)
Brecht, Bertold (1898-1956)
Büchner, Georg (1813-37)
Dürrenmatt, Friedrich (1921-90)
Fontane, Theodor (1819-98)
Goethe, Johann Wolfgang von (1749-1832)
Grass, Günter (1927-)
Halbe, Max (1865-1944)
Hebbel, Friedrich (1813-1863)
Heine, Heinrich (1797-1856)
Hoffmann, Ernst Theodor Amadeus (1777-1822)
Hofmannsthal, Hugo von (1874-1929)
Kafka, Franz (1883-1924)
Keller, Gottfried (1819-90)

Lessing, Gotthold Ephraim (1729-81)
Nietzsche, Friedrich (1844-1900)
Raimund, Ferdinand (1790-1836)
Reuter, Christian (1665-1712?)
Rilke, Rainer Maria (1875-1926)
Schiller, Friedrich (1759-1805)
Schnitzler, Arthur (1862-1931)
Stifter, Adalbert(1805-68)
Sudermann, Hermann (1857-1928)
Suttner, Bertha von (1843-1914)
Tucholsky, Kurt (1890-1935)

（2010 年 10 月擱筆）